

Philologie de la civilisation japonaise

Cours du 5 février 2013

Le Go-Shûi-waka-shû

*Seconde anthologie des glanures
poétiques*

- Première partie -

• 1210

和泉式部

法師の扇をおとして侍りけるをかへすとて

儂くも忘れにける扇哉

おちたりけりとひともこそみれ

• 1217

大江匡衡朝臣

めのとせむとてまうできたりける女のちのほそく侍
りければよみ侍りける

儂くも思ひけるかなちもなくて

博士の家の乳母せむとは

• 1218

赤染衛門

かへし

さもあらばあれ大和心し賢くば

ほそちに付けてあらす計ぞ

- 白河天皇 1053-1073-1086-1129
Shirakawa
- 藤原通俊 1047-1099
Fujiwara Michitoshi
- 源經信 1016-1097
- 難後拾遺集
- 後拾遺問答

- 我が君の天の下知ろしめしてよりこの方、
四つの海浪の聲聞えず、九つの國貢ぎ物
絶ゆることなし。
- おほよそ日の中に萬のことわざ多かるな
かに、花の春月の秋、折につけ事に臨み
て空しくすぐしがたくなむ坐します。

- これに由りて、 近く侍ひ遠く聞く人、月にあざけり風にあざけること絶えず、花を弄び、鳥をあはれはずといふことなし
- 遂におほむ遊のあまりに、敷島のやまと歌集めさせたまふことあり。拾遺集に入らざる中頃のをかしき言の葉、藻鹽草かき集むべきよしなむ有りける。

- 天曆の末より今日に至るまで、世は十つぎあまり一つぎ、年は百年あまりみそぢになむ過ぎにける。住吉の松久しく、あらたまの年も過ぎて、濱の眞砂の數志らぬまで、家々の言の葉多く積りにけり。
- 言を撰ぶ道、すべらぎのかしこき志わざとでもさらず。ほまれをとる時、山がつの賤しきことゝても捨つる事なし。
- 身は隠れぬれど名は朽ちせぬ物なれば、古も今も、情ある心ばせを、行く末にも傳へむ事を思ひて撰べるならし。

• 445

清原元輔

紀伊守爲光をさなき子をいだしてこれいはひて歌よめとい
ひ侍りければよめる

萬代をかぞへむものは紀の國の

千尋の濱の眞砂なりけり

• 446

人の裳着侍りけるによめる

住吉の浦の玉もをむすびあげて

渚の松のかげをこそみめ

● 449 大江嘉言

三條院みこの宮と申しける時帶刀の陣の歌合によめる
君が代は千代に一たび

ある塵の白雲かゝる山となるまで

● 450 民部卿經信

承暦二年内裏の歌合に詠侍りける
君が代はつきじとぞ思ふ神風や

御裳濯河のすまむ限りは

● 452 能因法師

永承四年内裏の歌合に松をよめる
かすが山岩根の松は君がため

千とせのみかは万代ぞへむ

• 538 源兼長

物いふ女の侍る所にまかれりけるによべなくなりいきといひ
ければよめる

ありしこそ限なりけれ逢ふことを

など後の世と契らざりけむ

• 539 和泉式部

山里にこもりみて侍りけるに人をとかくするが見え侍りけれ
ばよめる

立ちのぼる煙につけて思ふかな

いつ又我を人のかくみむ

• 542 大納言行成

後れじと常のみゆきはいそぎしを

煙にそはぬたびの悲しさ

• 544 法橋忠命

入道前太政大臣のさうそうのあしたに人々まかり歸るに雪の
降りて侍りければよみ侍りける

たきど盡き雪ふりしける鳥部野は

鶴の林の心地こそすれ

「佛此夜滅度 如薪盡火滅」

• 541 左大將朝光

圓融院の法皇うせたまひて紫野に御葬送侍りけるに一とせこの所にて子日せさせ給ひし事など思ひ出でよみ侍りける

紫の雲のかけても思ひきや

春のかすみになしてみむとは

• 460 江侍従

陽明門院はじめて后にたよせ給ひけるを聞きて

紫の雲のよそなる身なれ共

たつときくこそ嬉しかりけれ